教育新聞

第2942号　（第3種郵便物認可）

発行所　教育新聞社
〒110-0005
東京都台東区上野3－17－7
代表　☎03（3832）3571
FAX 03（3832）3570
URL http://www.kyobun.co.jp
E-mail kyoiku@kyobun.co.jp
購読料　2625円（月額、税込）
振替口座　00170-6-4369
©教育新聞社　2010
週2回　月・木発行

分野を超えて社会科授業を創る①

新学習指導要領で求められるもの

玉川学園マルチメディアリソースセンター研究員
多賀　譲治

「おぼろ昆布」から見えてくる

新しい学習指導要領をくまなく読むと「地理と歴史の連携」「公民との関わり」のように、分野を超えた教材の取り扱いが目を引く。そこで初回にあたっては、それら3分野のかかわりという視点から、社会科の教材開発のヒントを示してみようと思う。

中世の海運と経済の発達

昭和44年、道路の拡幅工事中に37万枚という大量の銅銭が発見された。場所は函館の東、志海苔（しのり）町の海を臨む高台である。このあたりには古くから大きな館があったという言い伝えがあり、発見された銅銭はその館の宝だろうと町の人々は思った。このように土中からまとまって発見される大量の銭貨は今日「埋納銭」と呼ばれ、その後、日本の各地で発見されるようになった。

志海苔では発掘が行われ、後に大きな館址も発見された。南宋には「日本が大量に銭を輸入するのでデフレになった」という意味の記録があり、当時の日本が大量に渡来銭を必要とする経済状況にあったことがうかがえる。さて、問題は、なぜそのようなところに館があり、37万枚もの銅銭が出土したのかということにある。

採れた昆布は海岸といわず屋根といわず、立錐の余地なく広げられ乾燥された。それを読み解くカギが〝昆布〟である。北條義時が執権のころ、津軽では十三湊を拠点とする安藤氏が蝦夷管領となり、渡島半島を影響下に置いた。安藤氏は大陸との交易も行い、大いに富を築いた海洋性武士団であるが、国内において盛んになってきた日本海沿岸交易も積極的に進めていた。庭訓往来（ていきんおうらい）には、鎌倉時代になって宇賀の昆布が京都に送られるようになったとあるが、宇賀昆布とはまさに、志海苔の海で採れた幅広・肉厚の真昆布のことなのである。

これらを束にして廻船に積んだ行き先は敦賀である。敦賀は日本海と京都をつなぐ最短・最良の湊である。

昆布は廻船から小舟に載せ替え笙の川を遡上し、さらに荷駄に載せ替え峠を越えて塩津に運ばれた。塩津から坂本までは琵琶湖航路を使い、坂本からは再び荷駄で京都に運ばれた。

敦賀が最良の湊というのは、実に琵琶湖のお陰である。琵琶湖は京都に近い内海的な役割を果たしてきた湖であり、その意味では敦賀から続く日本海航路の延長といってもよい。波の荒い太平洋航路がまだ開かれていない当時、日本の南北を結ぶ航路は日本海にあり、富を蝦夷地にも与えたのだった。

ところで、敦賀の人はただ「右から左へ」昆布を運んだのではなかった。肉厚の昆布は味は良いが、そのまま出汁を取るには向かなかった。そこで彼らはそれを薄く削ぐことを考えたのだ。これが今日の「おぼろ昆布」の始まりである。幅広の「おぼろ」や細めの「とろろ」に加工された昆布は運びやすく、付加価値の付いた商品となり、その後の調理法に大きな影響を与えた。

生産地と消費地を安全かつ効率的に結ぶことは現代においても流通の基本であり、付加価値をつけることが、豊かさを求める人々の知恵であることも、いまの社会と何ら変わることがない。私たちの先祖は700年も前に、この「当たり前」のことをやってのけていたのだ。